

大木 昌著

『病と癒しの文化史——東南アジアの医療と世界観——』

山川出版社 2002年 199ページ

しろかわ ちひろ
白川 千尋

本書の著者は、もともとインドネシア経済史を専門としていた。しかし、死を意識するような重い病を経験したことなどによって、「歴史のなかで、自分と同じように病や死の恐怖におのきながら生きてであろう人々の日常生活や、その生活を取り囲む環境問題など」（192ページ）に関心を持ち、その研究に携わるようになったという。東南アジア、特にインドネシアの人々の病と癒しの歴史に焦点をあてた本書は、その成果の一端である。ただし、もちろんそのような個人史にまつわる私的な動機だけから本書は書かれたわけではない。著者は本書で、これまで東南アジア史のなかで正面から論じられることがほとんどなかった「ごく普通の人びと」（13ページ）の病と癒しの歴史に目を向けることにより、為政者やエリート、あるいはそうした人々と関係の深い政治や経済制度などに重心が置かれがちであった従来の東南アジア史を相対化しようとしているのである。

しかし一方で、「ごく普通の人びと」の歴史を跡付けていくためには多くの困難がともなう。その最たるものが記述資料の欠如だ。現在に残された資料の多くは為政者やエリートについてのものであり、民衆の生活や思考の足跡を明瞭にたどれるものではない。ではどうすればよいか。著者はこの難点を、「歴史的想像力」（6ページ）をはたらかせることで克服しようとする。「歴史的想像力」とは記述資料の空白部分を埋めるための推理や想像力であり、「たとえば、19世紀のジャワ農民になったつもりで、『もし』このような状況におかれたら自分ならどのように感じ、行動するだろうか、といった想像や、一種の思考実験」（7～8ページ）である。この「思考実験」の際には、おそらく冒頭で触れた著者自身の病の経験も重要な参照点になっていたのだろう。

いずれにせよ、こうしたユニークな手法が記述資料と併用されることで、「もう一つの東南アジア史」が姿を現してくるのだ。

さて、その内容だが、本書は6つの章からなっている。まずはじめに第1章で、これまでに触れてきたような本書の目的や方法などが述べられる。そして、第2章以降で、インドネシアの民衆の病と癒しの歴史が時系列に沿ってつづられてゆく。その際にはヒンドゥー化、イスラム化、植民地化という3つの大きな出来事が基軸に据えられ、それらの出来事にともなう人々の病気に対する見方や対処法、身体観や世界観などが、ヒンドゥー化以前の段階から変容していくさまが、読みやすい文章とともに描かれる。

ところで、評者は本書を読み進めるうちに、本書の対象とするインドネシアとはどこかという疑問をもった。著者はこの語を現在のインドネシア共和国に含まれる地域を指すものとしているが（31ページ）、ならばそこには本書で中心的に扱われているジャワやスマトラはもとより、たとえばニューギニア西部やその周辺の島々なども入ってこよう。しかし、ヒンドゥー化やイスラム化が顕著でなかったこれらの地域において、本書で描かれた歴史が該当するようにはみえない。そしてそのことを念頭に置かならば、本書でインドネシアという語が先の定義とともに使われることは、いささか不適切に思えてしまうのだが。

ただし、そうした疑問は少数にとどまる。対照的に、本書のなかではいくつもの示唆に富む指摘に会える。ヒンドゥー教やイスラム教が浸透し得たのは、これらの宗教自体が人々にとって、従来のものよりも強力な癒しを提供するものであったためという指摘などは、そのひとつだ。また、交易などのために古くから多くの中国人が東南アジアにやって来ていたにもかかわらず、人々の間にその医療が広まらなかった理由に関する考察も興味深い。しかし、種明かしはやめておこう。それを知りたい向きには、また東南アジアや病と癒しなどのトピックに関心のある向きには、本書の一読を広くお勧めしたい。

（新潟大学人文学部助教授）